

参考資料 5

分類名〔病害虫〕

「金のいぶき」のいもち病防除体系 追補

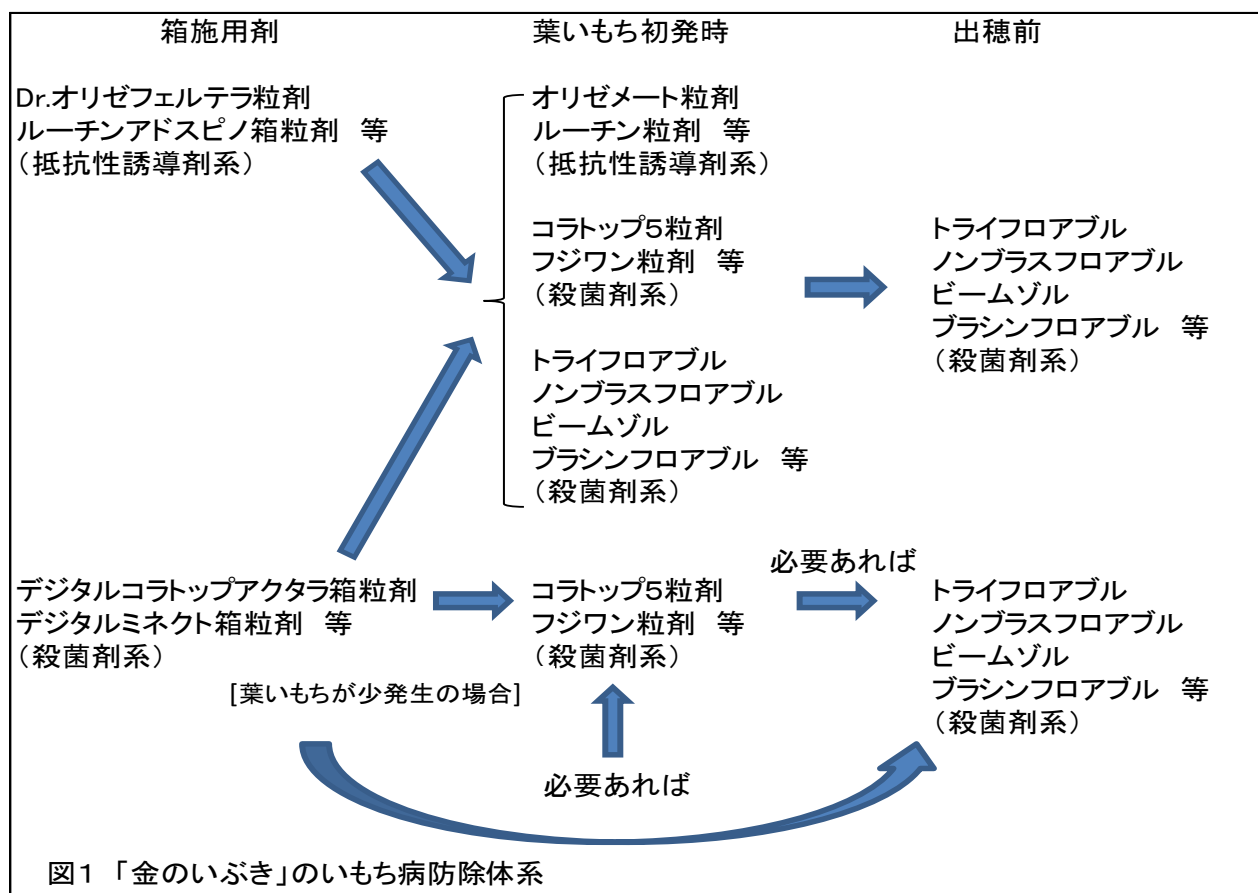
宮城県古川農業試験場

1 取り上げた理由

低アミロース性を持つ巨大胚品種「金のいぶき」のいもち病防除体系については、平成28年度の参考資料として示しているが、玄米での利用を想定していることから生産現場から農薬散布回数もしくは、使用農薬成分数の削減を求める声があり、今回、効用が異なる箱施用剤、水面施用剤、茎葉散布剤を組み合わせることで防除効果の向上が図られないか確認したところ、一定の効果が確認できたため参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 箱施用剤、いもち初発時、出穂前にいもち病防除を行う場合で穂いもち防除価が高い。（図1、表1の試験区①③⑤⑥、図2）。
- 2) 葉いもちが少発生の場合、箱施用剤、葉いもち初発時の水面施用剤もしくは出穂前の茎葉散布剤に殺菌剤を用いることで穂いもちにおいても一定の防除効果が期待できる（図1、表1の試験区⑪、⑫、図2）。



(問い合わせ先：宮城県古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

3 利活用の留意点

- 1) 試験は平成29年5月から10月にかけて古川農試内ほ場で行った。使用した箱施用剤はクロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤が「Dr. オリゼフェルテラグレータム箱粒剤」、ジノテフラン・トルプロカルブ粒剤が「ゴウケツバスター箱粒剤」で移植当日施用（5月11日）、水面施用剤はプロベナゾールバック剤が「オリゼメートバック剤」、ピロキロン剤が「コラトップ5」（7月11日施用）、茎葉散布剤はフェリムゾン・フサライド水和剤「ブラシンフロアブル」（いもち初発時7月11日、出穂期8月2、3日に散布、出穂期は8月15日）を使用した。
- 2) 防除回数を減らす場合、いもち病の発生を注視し場合によっては追加防除を行う。
- 3) 今回の試験はいもち罹病苗を設置する接種条件で行った。葉いもち、穂いもちとも少発生であった。

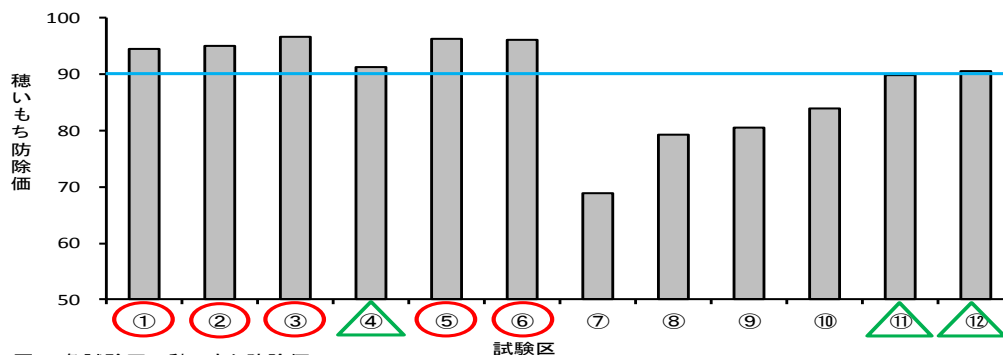
4 背景となった主要な試験研究

- 1) 研究課題名及び研究期間
 水稻奨励品種決定調査（宮城の「金のいぶき」生産拡大事業：平成28～29年度）
- 2) 参考データ
 以下のとおり。

表1 試験区分

移植時	いもち初発時	出穂前
① クロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤	+	プロベナゾールバック剤
② クロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤	+	トルプロカルブ粒剤
③ クロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤	+	フェリムゾン・フサライド水和剤
④ ジノテフラン・トルプロカルブ粒剤	+	フェリムゾン・フサライド水和剤
⑤ ジノテフラン・トルプロカルブ粒剤	+	プロベナゾールバック剤
⑥ ジノテフラン・トルプロカルブ粒剤	+	ピロキロン粒剤
⑦ クロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤	+	フェリムゾン・フサライド水和剤
⑧ クロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤	+	プロベナゾールバック剤
⑨ クロラントラニリプロール・プロベナゾール粒剤	+	トルプロカルブ粒剤
⑩ ジノテフラン・トルプロカルブ粒剤	+	フェリムゾン・フサライド水和剤
⑪ ジノテフラン・トルプロカルブ粒剤	+	プロベナゾールバック剤
⑫ ジノテフラン・トルプロカルブ粒剤	+	ピロキロン粒剤
無処理		+

※移植時(5月11日)に施用したのは全て箱処理剤、いもち初発時は7月11日にプロベナゾールバック剤、トルプロカルブ粒剤
 7月12日に茎葉散布剤のフェリムゾン・フサライド水和剤、出穂前は8月2、3日にフェリムゾン・フサライド水和剤を散布した



※防除価：穂いもち 100 - (試験区の被害度/無処理の被害度) × 100

穂いもち被害度：a+b×0.66+c×0.26 a:穂首いもち b:枝梗いもち1/3以上 c:枝梗いもち1/3未満の発病穂率

○は効果が高かったもの、△は効果はやや落ちるが一定の効果認められたもの

3) 発表論文等

- a 関連する普及に移す技術
 「金のいぶき」のいもち病防除体系（普及に移す技術第89号参考資料）
- b その他
 なし
- c 引用した文献など
 なし

4) 共同研究機関 なし